総合的な学習の時間部会

＜県研究主題＞　　児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案１　　提案者　　大村　伸（相模原地区）

＜研究主題＞　　児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善」 ～PISA 型授業を通して行う総合的な学習の時間～

１　提案内容

世界の国々に目を向け、開発途上国の状況や先進国との関わりを調べ、国際社会での自己の生き方を考えることを目標とした、５年生の実践。世界の国々の中でも、担任が海外研修で訪れたタンザニアを取り上げ、開発途上国やタンザニアが抱える問題について考えたり、スカイプを使ってタンザニアの小学生と交流したりして学習が展開されていった。校内研究テーマ「国際社会で生きる子どもを育てる～問題解決能力、社会的実践力を育てる鶴の台式ＰＩＳＡ型授業の研究～」と絡めての提案であった。

（１）鶴の台式ＰＩＳＡ型授業

ＰＩＳＡ型授業にいくつかの要素を肉付けしたのが鶴の台式ＰＩＳＡ型授業

①正確な読み取りをした上での討論

②討論による自分の考えの再構築

③体験活動の重要性

④討論に繋がる熟考・評価の発問

⑤多読

⑥内発的動機を喚起し、社会的実践力を育む「表現・実践」

総合的な学習の時間で重視されている言語活動と体験活動を学習の中心に置いているのが特徴といえる。スカイプ（インターネットを利用したテレビ会議システム）の情報ツールを言語活動や体験活動に活用して授業を展開した。

（２）成果と課題

①探究的な学習としての充実

ＰＩＳＡ型授業の「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」「表現・実践」の４工程と照らすと、この単元前半部分は「情報の取り出し」に、後半部分は「熟考・評価」「表現・実践」に重点が置かれる単元構成となった。このような構成で学習を進める中で、前の学習が新たな課題を生み、その探究が螺旋状に繰り返され、より大きな問題解決的な活動が展開できた。特に、スカイプを活用して実際にタンザニアの子どもと会話する活動は、子どもたちにとっても大きな刺激となり、そこでの感動体験は更なる学習意欲へと繋がった。

課題としては、タンザニアを教材とした国際理解教育が、５年生にとって少し難しかったという点と、単元全体を通して教師主導になってしまった点である。担任自身が大きな経験をし、子どもたちに伝えたいことがたくさんあり、また内容も難しかったので、「伝える」場面が多くなってしまった。

②体験活動と言語活動の充実

今回の実践では、直接相手と話すという活動が体験活動であり、言語活動でもあり、この単元の重要な要素となった。タンザニアから戻った青年海外協力

OG や在日タンザニア人の方、同じ年代のタンザニアの子どもと直接話すことによって、本やインターネットでは分からない生の情報を得ることができた。この生の情報は、本当のタンザニア、タンザニア人そのものを知ることに繋がった。また、オープンエンドの討論では、自分の考えを再認識したり、意見を変えたり、発展させることができた。

2　協議内容

〇教師主導という課題が残ったが、どう子どもが自ら課題を見つけたのか。

→　タンザニアありきでのスタートとなったので、押しつけにならないように１時間ごとに振り返ったり、〇×クイズをしたりするなどした。授業の中で、子どもから課題が出てきたものを取り上げていった。言葉が話せないのが子どもたちの大きな課題。

→　「友達になってくれますか？」に対する子どもたちの答え「イエス」から、どうやって友達になるのかが子どもたちの課題になるのではないだろうか。

〇１９時間の短時間では難しい中での実践だが、はたして探究的なのか。

→　子どもの本音が出てきたところが課題となる。「自分たちの貧しい姿が全世界に写るのはいやだ。」「世界とつながっている。」など、いかに自分の生活と結び付けていくのかが課題となる。５年の今の子どもたちがどう変わるのか、近いゴールを見据えるのも大事。どうやって、自分のところに落とし込んでいくのかが大事ではないか。

3　まとめ

（１）体験活動　言語活動の充実

鶴の台小の総合的な学習の時間の４工程とＰＩＳＡ型授業の４工程がつながっていて、スケールの大きい体験ができた。授業の中で、言語分析を丁寧に、体験活動の充実を図り、難しい内容をわかるための工夫（クイズ・ゲームなどを通して）をしていた。豊かな語り合いがされていて、自分の信じることを堂々と主張していた。

（２）探究的な学習

探究のプロセスを意識していた。感動体験があり、言語活動の位置づけがされていた。課題を情報収集する中で見つけていた。人との出会いやかかわりが重要な要素となり、その中でのずれやへだたりを感じ、予想と違う、もっと知りたいということが課題へとなっていた。他者との協同が個々の課題の深まりとなり、自分たちの願いをどう実現させるたらよいかを考えていた。

（３）子どもの思い、教師の思いとのバランス

バランスよく保つことの難しさがあった。体験や言語活動は、子どもたちの思いを実現する中で価値をもつ。子どものよさを引き出し、伸ばすことが重要である。教師の経験、児童観、教材観、学習の展開から教師が明確な目標をもつことが、子どもが主体的にやることにつながる。

提案２　　提案者　　久保　裕紀（湘南三浦地区）

＜研究主題＞　　児童一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善 ～児童一人ひとりの課題を探究し深める総合的な学習の時間を目指して～

１　提案内容

開校まもない汐見台小学校の学校教育目標は「つながろうとする力」である。「わたしたちの海」というテーマの下、児童一人ひとりが自らの課題を探究する中で児童同士の人間関係のみならず、地域・保護者の方々とも深く結びついてほしいと考え、学習材として海が選ばれている。海をきっかけにして学びを広げ、児童自身の課題解決のプロジェクトへの企画・立案・運営によってより主体的に「ひと・もの・こと」に関わる姿勢を培いたいと願い、単元が計画されている。「海に関わる活動を通して、海辺の環境の変化や自分たちの生活とのかかわりなどについて考え、自分たちの生活を見直してよりよい生活環境を創造し実践しようとする」を目標とした実践である。

（１）私たちの海の学習のあゆみ

①汐見台の海について見つめよう（５時間）
・汐見台の海についての捉えを発表しあう。
・実際の海に行って調査してくる。
・地域の方のお話を聞く。

海をどうしたら良いのか考える。
○なぜ「クソ下」と呼ばれているのか。
○殺風景な海岸→何をしたら良いか？
　マインドマップで自分たちの考えを広げる。

②汐見台の海の現状を知ろう（７時間）
・グループで汐見台の海の現状を調べるための調査内容・方法等を検討する。
・ビーチクリーン活動を行い海の現状を知る。
・調査したことを交流する。
・調査してきたことをまとめ、発表する。
★発表はしたけれど…課題ばかり見つかる。

さまざまな人にインタビューを行う。『ひと』『もの』『こと』のつながりを子どもたち自身で探すことができる地域となってきた。

とあるサーフショップのブログに子どもたちのインタビューが紹介され、一部のローカルのサーファーたちが「クソ下」→『汐小前』と呼ぶことを了解。
<u>自分たちの活動が地域の大人たち認められた喜びから、一気に活動が活性化。</u>

③自分たちができることから始めよう。（１３時間）
・海との関わりにおいて、自分たちにできることを考え活動を行う。
・自分たちが考えたことを実践する。〈実践は学年全体で行う〉
・実践を振り返り、グループごとの発表を聞き、今後の活動の参考にする。

児童一人ひとりの切実感のある想いが、活動を通して地域に伝わり始める。

④自分たちの考えを地域に広げよう（５時間）
・汐見台の海についての学習を振り返り、自分が感じたことや考えたことをまとめる。
・自分たちが考え実践したことから、地域における海の現状と問題点について地域の人々に伝えたいこと（考えてほしいこと、広げたいこと）をまとめ、発信する。
・単元全体の学習を振り返り、振り返りカードにまとめる。

（２）成果と課題

≪成果≫

○児童の活動が地域を動かし、総合的な学習の時間で『力』をつけられることを児童一人ひとりが実感することができた。

○さまざまな活動の際に保護者に学習参加を呼びかけ、参加していただいた方には児童を褒めて頂いたため、児童の自己肯定感を支える一助となった。

≪課題≫

●児童が継続したいという思いをつなげる手立て。

●平日の地域・保護者の方々の参加率。

●児童のモチベーションの差異が激しいことに対する学習指導の在り方と評価の工夫。

●年間指導計画を作成する際に、探究活動の広がりが想定できず、まとまりのある発表の活動まで見直すことができなかった。

２　協議内容

・最終的な子どもたちのゴールについては、プロジェクトごとにゴールやどんな力がつくかを子どもたちに書かせた。

・マイティーチャーという呼び方、放課後や土日に自ら動き出していること、サーフショップに出かけて行って、地域に認められているのが素晴らしい。

・４年生への発表は大枠だけが決まっていて、最後に勉強している中で広がっていった。

３　まとめ

～よさ～

①　生きる力を育むための学習　②問題の解決、探究の活動　③児童の思いや願いを生かす活動　④評価方法の工夫　⑤主体的、自主的な活動　⑥達成感、自己有用感をもてる活動　今回の単元は①～⑥のことがなされていて、探究的な活動が位置づいていた。

・途中の発表会は子どもたち同士で共有し、みがきあえる必然の場となる。大人もいるとなれば、大人向けにもなり、さらに磨きがかかる。

～課題～

・自主的な児童の活動はよいが、指導者として、子どもの動きを把握して事前のアプローチが必要かどうか吟味する必要がある。

・次の学年がこの活動を引き継ぎたいか押し付けずに、子どもたちの思いや願いを生かした、指導者としての心がまえが必要。

・地域の美化をやる必要があるように、つけたい力をつけるために活動するという思いをもたなければならない。何から見つけ、作り出していこうという事が大切。

４　グループ協議

テーマ　「子どもの願い、教師の思いを生かした単元計画の作成」

・　単元計画を立てる時に広がりを想定し、柔軟に対応できるものにしていく必要がある。

・テーマが決まっていてもそれを子どもたちがやりたいと思っているか。

・教材は豊富にある。それを生かす教師の力が必要。あらかじめ教師が教材研究をしていけば、子どものつぶやきを拾える。子どもと共に学んでいく。

・どんなテーマでも最終的に自分に返ってくるように組み立てるのが大切。

・地域とのかかわりがとても大切。文化を作っていけるような活動。